Title	Swastika 文様について(IV)：語原とその意義
Author	辻合，喜代太郎
Citation	大阪市立大学家政学部紀要. 1 巻 2 号, p.53-58.
Issue Date	1954-03
ISSN	0473-4742
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学家政学部
Description	

Placed on: 大阪市立大学学術機関リポジトリ

Placed on: Osaka City University Repository

Swastika 文様について

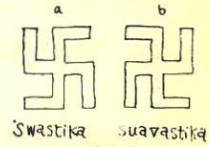
Ⅳ —語原とその意義—

辻 合 喜 代 太 郎

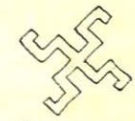
法隆寺中門、金堂、五重塔各層の勾欄の装飾文様を一般に Swastika (卍)、特に 卍 崩し、文様と呼んでいる。[註1] 現在この文様は建築装飾文様よりも寧ろ仏教的な文様として仏像台座又は仏自身の象徴として用いられている場合が多い。[註2] 然し西洋においては古代に既に Vase, spindle whorl 等に広く使用された例がある。[註3] 本稿に於ては Swastika の語原と其の意義について述べようとするのである。

Swastika の語原

Swastika は Svastika, (右旋) 第1図 (a)、 Suastika, ; Suavastika (左旋)[註4] 第1図 (b)、ともかき我国では万字形、鉤十字形と呼ばれ、恐らく我が国へは仏教渡来と同時に伝播されたものであり、原始時代には未だ見られなかつた。然し、世界の各地では古代より用いられ特に古代印度の Hindu の儀式に用いられた神秘的な文様であり、[註5] 後仏教、Brahman にも盛んに使用され、何れも Holy (Sacramentelle) の記号としていた。 西 Asia の Susa, Tripolie (第2図)[註6]、Etruria, Rhodes 地方出土の vase. potery (第10図) 等の装飾文様とし又支那に於ては古代土器 (第11図) にも見られ、更に ordus 地方の景教徒には多く Seal として使用されていた。[註7] (第4.5図)、今 Swastika の語原について、之は本来 Sanskrit に由来したもので、

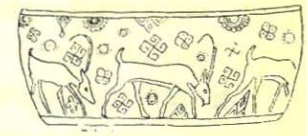


第1図



第2図

Rhodian vase.


第10図

Ma-ch'ang painted ware

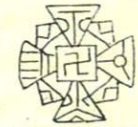
第11図

(Ⅰ) Swastika の語の Su は 'Good, を意味し、 asti は 'Being 又は Good being with the Suffix, で、Ka は Greek の 'na, Latin の 'co, であり、Swastika は 'Happiness, 'pleasure, 'Good luck, を意味していた。[註8]

(Ⅱ) Mr. Dumontier[註9] は Su は Radical で 'Good, 'well, 'excellent, 又は Suvides 'prosperity, を意味し、asti は三人称で現在動詞 as (to be), Latin の Sum に等しく Ka は接尾語であると解した.

(Ⅲ) prof. Whitney は Swastika は Sanskrit の 'of Good fortune, で Svasti (**Su** ; well + **asti**, Being) の意味で 'Walfare, であり、fylfot も同意義とした。

(Ⅳ) Max Müller は "lios,, に於て svastika は svasti から導かれ、svasti は **Su'** "well,, と as "to be, に由来し svasti は屢々



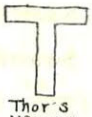
第4図

第5図

veda から導かれ、それ等は何れも 'Happiness, を意味した名詞とした。又副詞としては 'well, 'Hail, と同意味に解し常に仏教と jains とに見出された Auspicious（吉兆）の記号であり、之の記号は既に之に名称を附与する以前に神秘的な記号として存在し、仏教はこれに象徴的な意義を含ませたに過ぎないと解した。

（V）支那では Swastika は 'wau, とよび、'many, 'Great, 'Number, 'Ten thousand, 'infinify, を意味し 'long life, 'a multiture of blessings, 'Great Haqpiness, と解し、後には「吉祥如意」「吉祥万徳之所業」又は「仏心印」とも「万寿無量」の表徴とした。

（VI）Britain では Swastika を 'fylfot, とよび、Anglo-saxon の 'fower fot, から由来した。これは '4' 又は多数の足、を意味した語であり、George. warlng[註10] は 'fylfot, は Scandinavian で使用された古代の Norse の 'fiel, に相当し Anglo-saxon の 'fela, German の 'veil, であり多数の足を意味していたと解し、France では 'croix, Gammée 又は 'Gammudion. といい更に 'Croix Gramponnée, 'croix pattée, 'croix a'crochet, とよんだ。Norway では特に 'Thor's Hammermark, とよんだのである[註11]。（第3図）



第3図

Swastika の意義

古代に於て Swastika の起原とその初期の存在に関する文献は見当らない。Swastika の意義を明確にする為には Swastika が次の様な目的に従つて使用された事実を予知し考察することが必須的な条件である。

Ⅰ　象徴としての意義

（1）宗教のため　（2）国民又は民族のため　（3）特殊の Tenet をもつた儀式のため

Ⅱ　護符又は魔除けとしての意義（Amulet or charm).

（1）幸運又は幸福、永久の生命保持のため　（2）祝福又は帰依のため

（3）兇悪な眼に対して

Ⅲ　装飾としての意味

Ⅰの意味は本来、特定の国に於いて特定の人々により使用されたものであり、一国から他国へと伝承し又一時代から次の時代へと伝来したもので、広範囲の人々に伝承されたものである。Ⅱの意味は原始時代に於て偶然の発見に基づいて個々の国々に広く使用したもので他の記号と何等のContact 又は伝達する事なく行われたものである。其の起原と初期の伝播に関しては積極的な且つ明確な事実は到底把捉することは不可能である[註12]。依つて不確実な限界の前提に於て考察する外に方法はない。又Ⅰの意義に直接関係している既知の事実と比較して論考しなければならない。一方、Ⅱの意義は概して間接的である。更にⅢの意義に於ては討議に依存して結論づけたもので、その個有の意味を各々に附与したのである。

Swastika の移入の可能的な広範囲の拡がりと種々な民族間に用いた事実は考学者や人類学者の課題として極めて興味深い問題である。単に象徴として又護符として理解された Swastika の意義の考察は現代の科学的方法に基づいて次の問題を対象として考察するを要する。

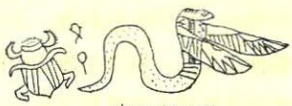
I. Swastika が或る特定の地で発生しそれが漸次各地への伝播の過程をとつたか。II. 又個々の民族間に個別的に発生したものであるか。III. 個々の国で発生した理由、作風について深い根拠の有無等が一応考えられる。この問題の考察に於いては継続的にその理由と論理的な法則を把握する必然性がある。而して未知の想像や予測し得ない方法でそれ等を説明することも、又事象を能動的に把捉する事も不可能である。従つてそれに関しては何等主張する独断も、空想的な思索も存在し得ない。若し Swastika が確かに移入されたという事実を仮定するならばそれと共にそれが必然的に要求したものが考慮の対象とならねばならない。このような場合、当然この仮定された結果に必然的な意義を承認せねばならない。

古代に於ては Cross の或る形式の最初の出現とその初期の発展経過は全く未知である。[註13] それは地方性と時代性に関しての何れかに就いてその起原を確かに告知する事は極めて危険なことである。Swastika の起原は確かに prehistoric に属する。[註14] かの Hissarik の丘の古代 Troy 地区の第三、四、五都市発掘に基づいて、之が往時広く使用された事実が明かとなり、[註15] 又 Bronze Ageに於ても又明かに地中海から Arctic ocean に至る西欧を通じて汎く存在していた。更に欧洲では iron Age にも伝承され、又 Etruscan. Greek, Trojans にも存在していた事実は疑う余地がない。即ち Swastika と呼称された名称は前述した様に Sanskrit であり紀元前4世紀に先立つて使用した pâninis 文法に於て特別に又は個性的な発音を保持したものであり長年月に亘つて Sanskrit を常用とした民族間に普遍的に使用されたものである。故に「Swastika は Aryan の象徴であり Asia と Europe を通じての伝播以前に Aryan によつて特別に使用された」とも述べている。[註16] この説は明確な解明であり、而して同時に神秘的な象徴又は護符、魔除、幸運、幸福の記号としての両者何れかのしかも如何なる意味でこれを解明されていたものであるかを思惟する必要がある。かくて今日 Aryan 自身が欧洲各地への移動に随伴して Swastika の各地への伝播過程を考究すべきである。更に又、prof. Sayce[註17] は次の見解を示した。「Swastika は本来 Hittite の象徴であつた。而して Aryanに伝達されたか又は最後に行われた伝播以前に其の主要な部分の一部が他に伝播されたからである。然し彼は Swastika は Assyrian, Babylonian, phenician, Egyptian には未知であつた事を認めた。」

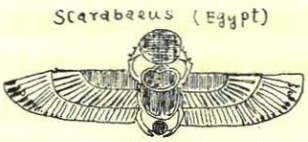
Swastika がその伝播以前に既に Assyrian, Caldean, Hittite に於て使用されたものであつたか、或は仏教が india に到来する以前に Brahman に既に使用されていたか否かという問題は、結局に於て Swastika の移入又は伝播の細部に関した問題であり寧ろ重要なことは Swastika の使用が chaldean, Hittite. 又は Aryan の何れかに先行して Bronze Age に多少とも使用されたものであるか否かが更に主要な論点であろう。この問題について最も妥当的な見解はその問題に関して常に正常な又は予知した見解を避け、本来的な意味に於いて推究しなければならないのである。かくてこの問題の検討には当然次の事項を考察すべきである。1. 或る形式に於て Swastika は古代宗教哲学の象徴として存在したか、又は或る特別な Sect. 教義、信仰、理想の象徴として存在していたか、或はその両者に関係して存在していたか。2. Swastika に与えられた意味より推究して其の価値を認めて使用せられたものであつた charm 又は amulet の意味として使用したもので

あつたか。3. 人類の初期の移動に際して其と共にある特殊な意義を教示したものであつたか。

以上の問題に関しての個々の吟味は恰も日常生活に於ける場合と等しく歴史的事実の中に容易に見出し得るのである。Egypt, Etruria の Scarabaeus（第6、7図）（甲虫）は Eternity（永久性）の象徴であつた。又貴婦人の用いた黄金製の指環は Snake（Nagā）がその尾を呑んでいる状態を表現したものであつた。これも又〃生命の永久性〃の象徴である。これ等はその感情を吐露したものであり、Sect や組織化した肉体を表現していたのではない。



第6図



第7図

他方に於て、Maltese cross は Malta の knight の象徴であり之は後世に到つて Masonic 団体の象徴と化しその三個の環は 'old Fellows, の秩序の象徴となつた。[註18] 更に Latin cross は基督教の象徴であり更に広義に用いられて基督宗派の象徴ともなつているのである。

以上の引例と同様に Swastika は最初 Tibet に於て本来的な Buddhist church の中に於て Jains の Sect の象徴として用いられた。（第9図）而してそれ自身は Tao-sse, Tirthankara, Ter, musteg, pon 又は ponpo の名称で用い、後には純粋な意義をもつて伝播されたのである。[註19] 之等の Sect には勿論 Swastika はその象徴として適用された。即ちそれは前述した Swastika を 'well, と 'it is, と解し、結局 'it is well, 又は 'so to it, の意味と解し之を象徴化して、凡て精神の平和と平静な人間の主要な唯一の目的と考え之を表現したのである。而してこの Sect に於て Swastika は勿論、双方の教理の象徴である。それは宗教的又はこの道徳的、哲学的な idea を表わす様になり更にこの idea を維持する Sect そのものの表現ともなつたと解されるのである。

第9図

Buddhist 個有の象徴としても又重視されて来た。これはその指導者即ち宣教師又はかの布教の Holy な神秘的な対象の何れかに関係した Buddha の pada（仏跡）（第8図）の記号と推論されている。又 Buddha の Bronze 像の記号と cave Temple の外面に刻された神秘的な記号との結合は明かに其の特性の多少に拘わらず常に象徴として使用されたのに相違ない。

第8図

又 Burnouf[註20] に拠ると「Swastika は Rome にある Catacombe の基督教徒の墓室に無数に使用された。之はその使用が宗教的な idea の象徴とした意味をもつた神秘的な而かも極めて厳粛な特性に関して広義に使用された事を明示した」と述べたのである。

之等の諸例以外に Swastika は或る宗教的、哲学的理念又は儀式、組織の象徴として使用した例も多数に見出し得るのである。

西欧特に Trojans, Greek, Etruscan, 或は Bronze Age. に於て、更に南、中央、北 america の未開人（mound Builder）等に於ては彼等は明かに Swastika を 'Holy, 'godliness, 'piety, 'morality, の光を意味した神秘的な所謂 "Holy,, 又は "Sacred,, の対象として使用した諸例を見出し得るのである。就中、若干のものは未開人が彼等の宗教の Sect 又は祭祀に関する対象物に於

てか或は彼等の idea の中に、半神秘的な特質と解して Swastika を使用したことも又見出し得られた。然し一概にそれ等は斯様な idea を代用している或る〃神〃や〃絶対者〃 'Holy idea, を表徴しているものとは断定できない。即ち Zumī の Sect に於て行われる meal は神秘的なものと関聯性をもち、実際に、石製の Metate 上に彫られた Swastika は Holy の特質を備えていたものであつたとは解することは不可能である。故にその Metate 上に fret（雷文）、cheoron（山形文様）、Herringbone（矢筈状文様）又は他の無数の文様で装飾されていたものが存していた。従つて之等のものは或る特定の神秘性を装飾的に表現したにすぎないのであり、その対象物の上に常に Swastika を見出し得ると信じていた。而してその意味は 'Holy, ではなく、又神秘的な意味でもなく、単に装飾としての意味があつたのであろう。Swastika は太陽、又は太陽神、雨又は雨神、雷光、Dyaus, Zeus 又は Agi,[註21] phebus 又は Apollo 又は神話的な多数の神々にその本質的な関聯性を見出そうとしている。この問題が確実に結論づけられると仮定する場合ここに極めて興味深いものがある。この問題に関して今後更に十分な検討が残されているのである。

Swastika が prehistoric の人々や Buddhist 以外の他の東洋人の間に極めて普遍的に使用された意義は凡て幸福、幸運、不死、祈願、祝福を意味した amulet か charm としてあつた。

斯様に prehistoric Age を一覧した後、次に Swastika が比較的無意味（宗教的な象徴以外）な対象物に使用されていたことに注目し、検討しなければならない。即ち其の例は花瓶、壺、水差、道具、家庭用具、化粧用具 ornament 等に於てである。而して時には又彫像、祭壇等にも使用されたこともある。Armenia に於ては Bronze の pin や釦にも使用され、古代の Trojan[註22] の都市では前述の Spindle weorls に、Greek では土器又は黄金製又は Brsnze の装飾品と fibulae（釦金）にも見出された。西欧の Bronze Age（勿論、Etruria も包括して）に於ては、土器 Bronze fibulae, Spindle whorl の様な日常生活の用具に使用されていた。加うるに他面、Swastika が地方的に特殊な意味を与えられて使用されていたことも等閑視できない事実でもある。例えば、Italy では死者の灰を納めた hut-urm にも使用し、Swiss lake では土器に印刻した。又 Scandinavian に於ては槍、剣等の装飾文様として使用し、Scotland, ireland, では襟留、pin, 等に広く用いた。更に特殊な用法としてはかの Armeria に於ては穀物粉砕用の metate[註23] の上に印刻された。Brazilian では土器の表面装飾として意匠的に独創的なものを案出した。pueblo indian は彼等の舞踏用とした Rattle（楽器）の表面に描画した。Arkrnsas と Missouri 地方の泥で家屋を構築した原始期に属した北 american indian は土器の表面に Spiral の形式に変形した Swastika を画いたのもある。又 Tennessee 地方では之を貝殻上に顔彩を以て描き、ohio に於ては頗る正常形な銅製の sheet で打出した作品も見られた。

次に現代の indian では Swastika は Sect 例えば Navajoes によつて行われる Mountain chant（聖歌）や Kansas に於ての戦歌の合唱に際して同席した women が使用した Necklace と sect にのみ特に使用する Garter 上に文様として欠くことの出来ないものである。又 pima では美しく楯の装飾として愛用されていた。

America に於て彼等の土着の宗教的な記念物や古代の神像、偶像及び他の神秘的な対象物に表

現されていた例は極めて稀である。彼等はこれを Shell, copper, plaques., (額) Spindle whorls, metate, pottery, bowl, Jug, Bottle, vase の表面に見出し得た様に何等そこに宗教的な雰囲気を象徴して使用したものではないと考えられる。更に労働者用とした tools にも又彼等が愛好した Game 用具、舞踏用具にも必ず装飾として使用した。この事実は結局宗教的な意味を含めた象徴ではなく単に〃幸福〃の 'charm, としてのみ使用したと断定してよい。然し、使用目的の意義に於て若干は神秘的な特性をもつてそれを Sect の場合に使用せられたことは否定できない。

このようにして、Swastika は日常の生活用具、化粧用具、個人的な装飾に広く使用されたものと推察できる。このことから、それが神秘的な象徴の意義として使用された例に比較して極めて無数の事実を肯定しなければならない。然しこのことは Swastika の個有の意義を考究する場合に於て Buddhist, christian. 及び北 american indian が神秘的な Sect の象徴と解し Swastika は Holy 又は Sect の象徴の意義は可成無視されたとも解されたかも知れない。然しこの見解は一面、charm, Amulet, Hippiness, luckey の記号又は装飾としての意義が優越的に、Swastika の神秘的、宗教的な意義を凌駕していたと推断することは必ずしも妥当的な解釈とは考えられないのである。

註 1：伊藤忠太著、日本建築の研究.
2：東大寺大仏殿蓮弁毛彫菩薩の胸部
3：Thomas wilson : The swastika (Hissarik)
4：'Gamma cross, ともいう。
5：Jains では右旋 swastika を陽神で太陽、光、生命を象徴し、左旋 swastika を陰神とし死滅と暗夜を象徴した。而し両者は混用併用した。
6：Royal Anthropological institute : Early pottery of the New East, p 26
7：佐伯好郎著、支那綏遠出土の万字意匠.（宝雲）.
8：Revue D'Ethnographie IV.
9：Max Müller : illos, p 90
10：G. Waring : Cramic Art in Remote Age,
11：Stepheus : Old northern Runic Monuments plat Ⅱ
12：Swastika の起原に関しては別稿とする。（日本建築学会近畿支部報告昭和29. 1）
13：拙稿，日本建築学会報告（swastika と cross との関係），昭和28. 10.
14：印度 Mohan ja Daro 出土の Seal の文様として見られ B. C. 3000 に遡り、Asia Minor, Greek では BC 1200年度遡及して考えられた。(Goclet D'Alviella による).
15：Dixiéme congréss internationol d'Anthropologie et d'Archéologie préhistorique p 474
16：Goblet d'Alviella : La Migration des Symboles p 57
17：prof. Sayce : lios p 353.
18：18世紀に創立された共済組合の名称。
19：Sakya 降臨以前の B. C. 6世紀に indian, china で使用した。(C. Sykes : Notes on the Religious, Moral of india)
20：Burnouf : Des Science et Religion p 252
21：Agi は古代 india に崇拝された '火の神' である。
22：Dr. Schliemann. : Troja, p 299.
23：表面が平面又は稍々凹み、小麦類をのせ小石で粉砕する臼の様なもの。

（本稿のため種々と御便宜を与えられた京大村田博士及び東大近藤四郎氏に深く感謝する）